

142. 北大津遺跡出土の須恵器資料 —昭和48年度の調査より—

1. はじめに

当遺跡は西大津駅建設工事の際発見されたもので、皇子ヶ丘二丁目から桜野町にかけて広がる弥生時代後期～古墳時代前期及び白鳳時代～奈良時代を中心とする複合遺跡である。

このうち昭和48年度調査区は、161号線バイパスと西大津駅駅前広場とをつなぐ都市計画道路内にあり、西大津駅のすぐ西側、現駐車場の南側に位置する。

近辺の遺跡として代表的なものをあげると、北北西約450mに大津宮錦織遺跡があり、推定の外郭線が約

60m近くにまでせまっている。また北西600～700mに皇子山古墳群があり、その西隣りには、山田古墳群や部屋ヶ谷遺跡がある。

2. 遺構の概略

本調査区では竪穴住居跡(SB)4棟以上、掘立柱建物(SB)6棟以上、土城(SK)7基、溝(SD)8条が検出されている。(図1参照)

竪穴住居跡

床面積約10.2～16.8㎡の大きさを計り、造り付けのカマドを伴う。計測値は以下の通りである。約3.9×3.3m(SB-3)、約3.5×2.9m(SB-4)、約4.2×4.0m(SB-6)、短辺約2.9m(SB-9)。このほかSB-3とSB-4の西側に切り合っただけの竪穴住居跡らしいものがある。ただし、SB-4西側のものはSD-5と全体が重複するため最終段階で取りはずされている。

関連する遺物としては、SB-3内よりNo.32、その東側の落ち込みからNo.33、SB-4とSB-6付近からは、それぞれNo.23とNo.16が出土している。

掘立柱建物

SB-1は2間×2間、SB-2は2間×2間以上、SB-5は1間×3間、SB-7は1間×2間、SB-8は2間×3間、SB-10は1間×2間の建物である。このうちSB-2については、その切り合いからSD-1よりも新しいことがわかる。また、不整形か円形で不揃いの柱穴をもつSB-5、SB-7、SB-10などは案外古い様相を示すかもしれない。しかし、その他のものも含めてこれらの建物に伴う遺物はなく、年代については今後の課題である。

土城

方形のものが4基、楕円形が2基、円形が1基である。この

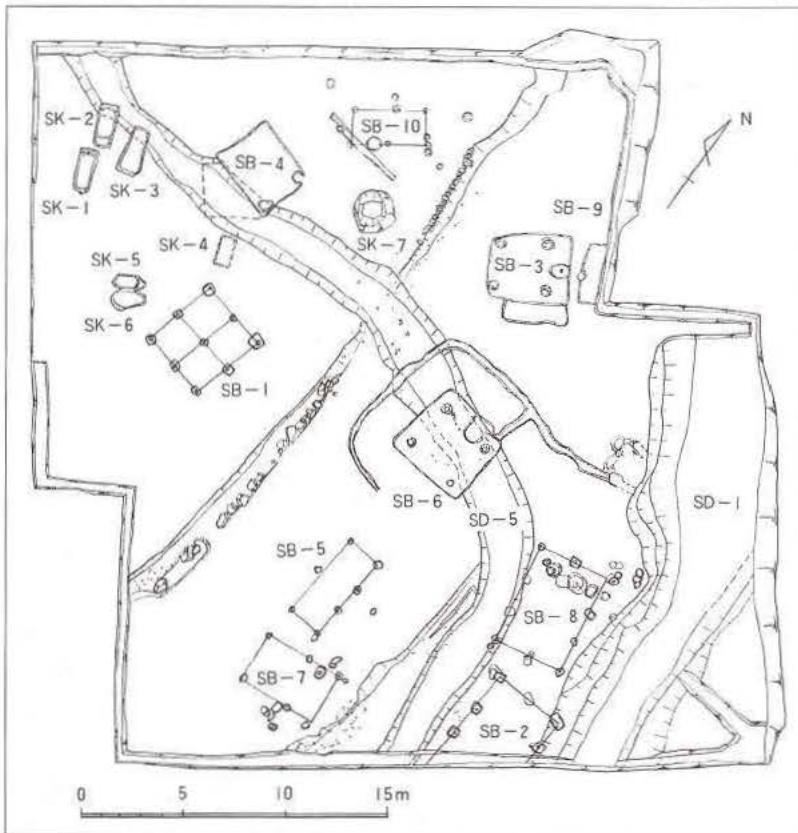


図1 昭和48年度調査区遺構図

うち方形のSK-1の床面南半には、木棺の底板と思われる腐食木材の繊維が広がっていた。したがって方形の4基は土壇墓と考えてよい。関連遺物として、SK-1よりNo12、30、SK-2よりNo15、30(SK-1と同一個体)をあげることができる。

溝

SD-5は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を伴い溝幅1.32～3.28m、深さ1.3～0.3mのU字溝で、下流へ向かうほど浅くなっている。

SD-1は、N-5°-Wのはば南北に流れる幅6m、深さ1mほどの大溝であるが、北の部分の右岸が大きく広がっている。下層には古墳時代前期の遺物を含み、上層の黒褐色腐食土層には多くの木製品やNo.1～11、13、14、17～22、24～31の須恵器が出土している。

3. 分類 (図2参照)

坏蓋A(1～13) 擬宝珠様つまみをもち、かつ口縁部内面にかえりをもつもので、口縁径により二種類(A-1、A-2)に大別することができる。

A-1は、口縁径が10.2～11.5cmの範囲のものとした(1～6)。ただし、その仕上げ方によりさらに二分することが可能で、内外面全体にナデ調整をおこなうもの(1～3)と天井部などヘラケズリで終わるもの(4～6)がある。これらのほとんどはかえりが口縁部よりも内側にあるが、下方へ突出しているものが1点ある(5)。なおNo.2は天井部をヘラケズリしたのちナデ調整で仕上げている。

A-2は、口縁径が13.5cm以上のもので最大が17.2cmである。内外面ともナデ調整で終わるもの(7～10)と、天井部外面及び口縁部近くまでヘラケズリを残すもの(11～13)とがある。また、かえりは口縁部とはほぼ同じか内側にある。

このようにA-1、A-2の中には、それぞれ全面ナデ調整をおこなうものと天井部を中心としてヘラケズリを残すものの二者がある。

坏蓋B(14) 口縁部内面にかえりがつかず、天井部につまみをもつと考えられるもの。直線的に開いた天井部は、口縁部先端を外下方へ折りまげて終わる。内外面とも丁寧なナデ調整である。

坏蓋C(15) つまみのつかないもので、天井部は丸味をもち口縁部はやや内湾気味となり端部を丸く収める。口縁径11.4cmを計る。内外面ともナデ調整。形状により一応坏蓋としたが坏身として使用されていたかもしれない。

坏A(16～25) 高台をもたず底部は偏平かやや丸味をもち口縁部が外上方に開くもの。坏蓋Aと同様、その口縁径により二者に大別できる(A-1、A-2)。

A-1は口縁径が10～11.5cmまでのもので、底部が比較的平らなもの(16～19)と丸味をもつもの(20、

21)とに分けることができる。口縁部はやや内湾気味に外上方に開くが、前者のなかには直線的に開くものがある(18、19)。調整は、底部外面にヘラケズリのみられるものがある(18、20)が、他は内外面ともナデ調整である。さらに底部内面中央にタテナデがみられる(16、17、19～21)のも特徴的である。

A-2は口縁径が12.2cm～13.8cmのもので、平らな底部から直線的に外上方へ開く口縁部をもつ(22～25)。A-1のように内湾気味に開くものはみられず、むしろ外反気味に開くものがある(22、23)。底部中央は欠損しているため内面にタテナデがあったかどうかはわからない。

坏B(26) ハの字形に付された高台をもつもので、接地部分は水平である。内外面ともナデ調整をおこない、平らな底部から直線的に外上方へ開く口縁部をもつ。先端部は先細り気味で丸く収める。口縁径は14.0cmを計る。坏蓋との関係で言えば、坏A-1が坏蓋のA-1に、坏A-2とこの坏Bが坏蓋A-2にはほぼ対応するものと考えられる。

盤(27) 比較的平らな底部から外上方へ直線的に開く口縁部をもち、端部を丸く収める。内外面ともナデ調整をおこなう。

壺(28、29) 直立気味に開く短い口縁部に肩の張りのある体部がつく。沈線文が口縁部(28)または肩部と胴部の境(29)にみられる。内外面ともナデ調整を行なっているが、No.29の胴部外面にはヘラ様のシャープな削り痕がみられる。なお、No.29の肩部に粘土痕がみられるが、これは重ね焼きの痕跡と考えてよい。

甕(30) 外上方に外反しながら大きく開く口縁部をもつ。口縁部先端は折り返しにより肥厚気味に終わる。内外面ともナデ調整。体部にはタタキ目が残る。

底部(31～33) 壺の底部と考えられるもので、平底のもの(31)と高台のつくもの(32、33)とがある。高台はハの字形に開き、端面は外方にむいている。内外面ともナデ調整による。



北大津遺跡

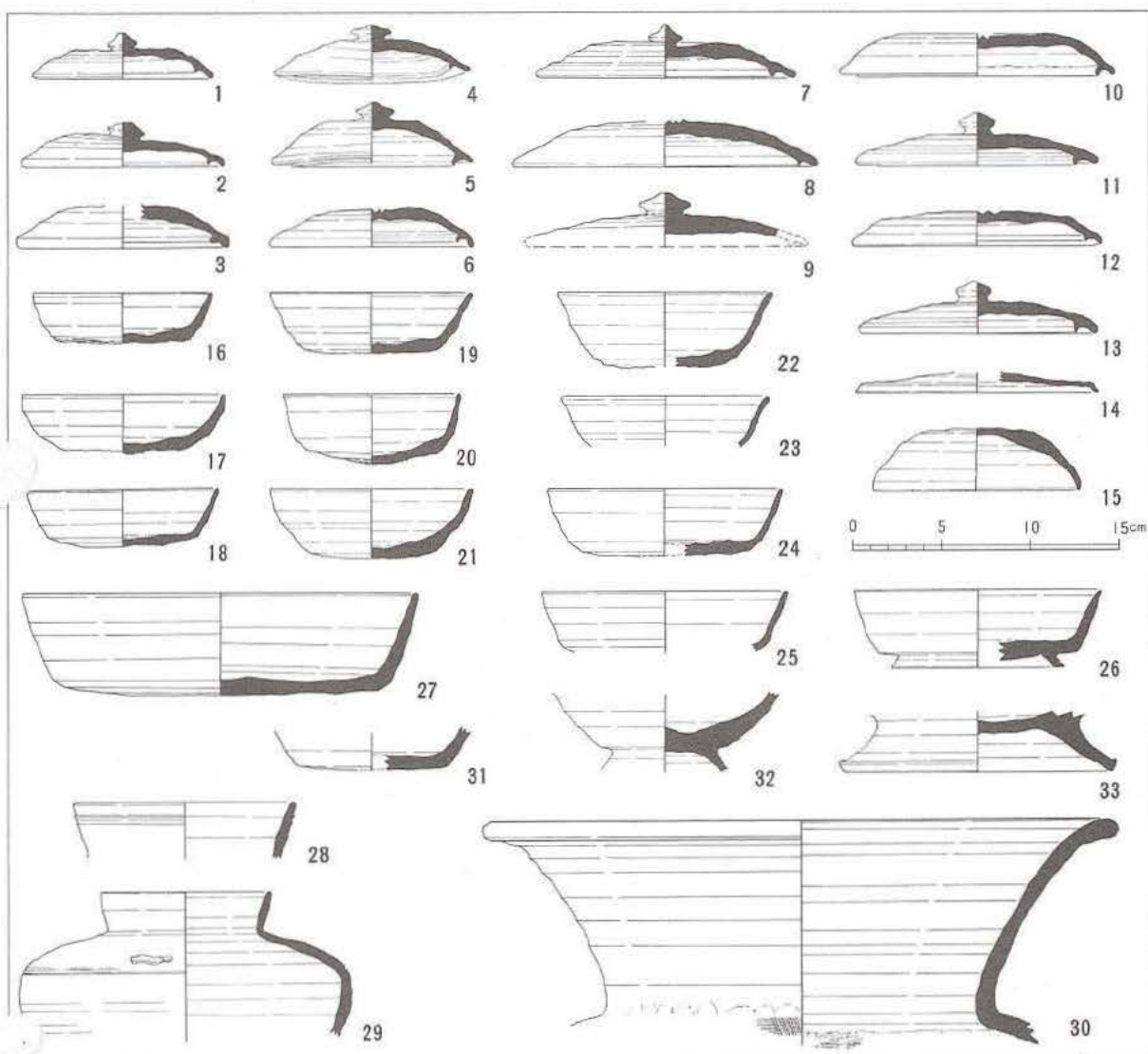


図2 昭和48年度調査区出土須恵器資料

3. おわりに

以上のように北大津遺跡から出土した須恵器の年代は、これらの特徴から7世紀中葉～後半代を中心に一部は8世紀代におよぶものと考えられる。特に、SD-1については方位がN-5°-Wとほぼ南北を示し、音義木簡などが出土していることから、大津宮錦織遺跡との関連が言われているが、調査区の東角、中心線で約16.5m程度の検出のため、今後方位等の再確認の必要性を記し結論は後日に残したい。

また、竪穴住居跡や土壘についてはSD-1の出土土器と大差がなく、時期的に重なりを持つこと（同時併存）は確実で、その特徴から遺構の下限を7世紀後半代に位置づけることができる。

なお、出土土器の胎土観察から、長石粒を多く含む

もの（3、4、8、11-16、18、19、21）と頁岩と思われる黒色粒が目立つもの（1、2、5-7、9、10、17、20、25、28-32）、及び双方とも多くは含まないもの（22、23、24）の三種類があり、供給地との関連によるものと推定できるが、これもまた今後の課題としたい。

最後に、松沢修氏の貴重な資料を参考にさせていただいたことを記し感謝の意に代えたい。（中西常雄）

参考文献

- (1) 林紀昭・近藤滋「北大津遺跡出土の木簡」『滋賀大國文』16号 滋賀大國文会編 1978年
- (2) 林博通『大津京』ニューサイエンス社 1984年
- (3) 中西常雄・石原道洋・山口辰一他『北大津の変貌』1979年

143. 秦荘町金剛寺野古墳群 出土の須恵器

1

秦荘町大字上蚊野より大字蚊野外の宇曾川北岸の地域には、かつて金剛寺野古墳群と呼ばれる、県下屈指の大古墳群が存在していた。この古墳群は、昭和20年代の後半より30年代の前半にかけて、食糧増産の名のもとに開墾せられ、消滅していったものである。この開墾工事中に出土した遺物も、紹介研究されることなく全くヤミに消え去ってしまった。これらの遺物のうち偶然にも筆者の手に入り保管してきた須恵器について紹介し、ありし日の古墳群の一端を偲ばんとするものである。

2

本古墳群の様相は、愛智郡誌第2篇古代志第2章古墳墓の分布と文化第7節秦川村の項に金剛寺古墳群として、出土遺物の図版とともに紹介されている。又、昭和40年度発行の滋賀県遺跡目録には、(31)愛知郡秦荘町の項に、

遺跡番号	遺跡名	種類	所在地	立地	地目	遺跡概要		時代
						遺跡	遺物(所有者)	
10	金剛寺野遺跡	古墳群	上蚊野蚊野外	丘陵	畑地	円墳298基	金環玉類	古墳
						横穴式石室	埴土器	
						残存20基	陶質土器	

として、記載されている。同誌によれば、総数298基のうち、大字上蚊野に102基、大字蚊野外に196基存在していたことが知られる。ゆえに、上記の遺跡目録の記述の範囲も、同誌の右に出るものはないようである。

従前の様相の記述については、同誌に依る外はなく、現在では、開墾地以外の地域に、小規模の古墳が点在するのみで、昔日の面影はない。

3

広口壺1 口径12.4cm、器高18.4cm(推定)、胴径16.5cm、口頸部は「く」の字状に外に開いており、口縁部の外側は幅0.8cm程度の帯状となり、口縁部は幅0.4cm程度の平坦面を有し、縁端は内湾する。肩部はよく張り、胴部より底部にいたる境界付近は内湾気味を呈している。底部は丸く収まり、全体として、よくまとまっている。色調は、外側は、暗灰色にして、内側は、暗黒灰色を呈している。焼成は堅硬にして、胎土は密である。仕上げは、肩部以上は、刷毛調整、胴部はナデ、底部は、篋削りとなっている。

広口壺2 口径9.7cm、器高16.5cm、胴径15.5cm、口頸部は「く」の字に外に開き直線的に立上っている。頸部は、やや内湾気味で、胴部以下は丸く収めている。

色調は、黒灰色を呈しており、肩部には自然釉の析出を見る。焼成は、堅硬にして、胎土は密であり、若干の砂粒を含む。調整は、胴部上半以上は、刷毛調整、下半は、ナデ、底部は、篋削りとなっている。

直口壺3 口径8.6cm、器高13.8cm、胴径12.0cm、口頸部は、やや朝顔状に開き、口縁部は外湾する。肩部は、直線的であるが、やや内湾気味である。胴部以下は、丸く収めている。色調は、灰白色を呈し、焼成は、軟質である。胎土は密にして、若干の砂粒を含んでいる。調整は、胴部以上は、刷毛調整にして、以下は、篋削りとなっている。

平瓶4 口径5.6cm、器高10.0cm、胴径10.8cm、肩部上面は丸く、体部以下も丸くおさめており、肩部上面にボタン状の突起を付している。色調は、暗青灰色で、胎土は密にして少量の砂粒を含む。焼成は、堅硬にして、胴部以上は、横ナデに調整し、以下は篋削りで仕上げている。

高杯5 杯部口径11.3cm、高さ3.7cm、器高13.5cm、脚端部径10.4cm、脚部は中央に位置する2条の沈線を境として、スカシを上下3ヶ宛付している。脚柱の内側は、横ナデにより仕上げられ、しぼりは認められない。又、上部において杯底より1.8cmの間は、中空状をなさず、粘土柱となっており、上部のスカシの上部2.9cmの間は、内側に貫通していない。スカシの内上部のものは、外側において、上辺長3.5mm、下辺長5.0mm、高さ41.5mmの長台形をなしており、中央部において幅をやや減じている。下部のスカシは、上辺長4.5mm、下辺長11.0mm、高さ31.0mmの長台形をなしている。又、下部のスカシの下端においては1条の浅い沈線を巡らしている。脚端は内湾しており、杯身外面には、2条の鋭い稜を有し、口縁部は、直線状に立上っている。色調は、暗青灰色を呈し、焼成は、堅微であり、胎土は、密にしてほとんど砂粒を含まない。

4

以上紹介した須恵器については、その器形より大略6世紀後半より7世紀の所産であると考えられる。

300基に及ばんとする大古墳群が、いかに国策とはいえ、調査も受けずヤミに葬り去られた事は、痛恨事であり、現今では、全く考え及ばない事である。当時県の文化財行政のうち埋蔵物に対する対応は、極貧の状態であり、この状態の中で、大規模な地域に対する調査を望む事は、不可能であった。又、文化財保護法の制定後日もまだ浅く、一般の文化財に対する認識も薄いことも相俟って、ついに、県下屈指の大古墳群は消滅したのである。この開墾事業推進の一員として関与した筆者としては、悔恨の念とともに、今後いかなる事情があろうとも、再びこのような事態が起らないように祈るものである。(佐藤宗男)